http://decfamily.p1.bindsite.jp/2017/

We 25R

No.287　17/10/20

すみれ砲

昨日の新聞にこんな記事が載っていた。見出しは「車いすから「すみれ砲」～感謝の軌道　高校体育祭の玉入れ～」

＊

兵庫県西脇市の県立西脇北高校（多部制単位制）の体育祭で、玉入れの球を飛ばす特製用具が活躍している。手足に障害がある生徒の藤原すみれさん（18）＝４年生＝にも競技を楽しんでもらおうと、プラスチック製の雨どいを使って創作された。通称「すみれ砲」は、今年も出番の日を迎えた。

体育祭は14日に開かれた。チーム対抗の玉入れはプログラムの最初の種目。車いすの藤原さんも選手入場の列に並んだ。運動会でおなじみの「フィガロの結婚～序曲」のメロディーが流れると、ワクワクした気分に包まれた。

グラウンドに白線で直径６メートルの円が引かれ、その真ん中に高さ３メートル余りの玉入れ台が立つ。競技開始と同時に紅白の球が一斉に宙を舞った。生徒たちが跳びはね、その笑顔が秋の光に映えた。

「すみれ砲」も快調に球を放った。保健体育の森川紗衣教諭（23）が付き添い、雨どいの内側にＶ字形に伸ばされた自転車のタイヤのチューブを引っ張って放すと、布製のふわふわした赤い球が長さ１・２メートルの雨どいの先から勢いよく飛び出した。

１分間の競技はあっという間に終了。盛り上がる会場で、藤原さんは「球はきれいな軌道を描いて飛び、うれしかった。玉入れのネットに入れることはかなわなかったけど、とても楽しかった。支えてくれたみなさんに感謝します」と大喜びだった。

藤原さんは当初、玉入れに尻込みする気持ちが強かったという。「球を思ったように投げられず、まわりの人に当ててしまうばかりで、かえって申し訳ないと思っていた」と振り返る。

藤原さんは来春に卒業するため、「玉入れの味方」の登場は今年が最後になった。

＊

「まわりの人に当ててしまうばかり」と、他の人のことを考慮して消極的になっていたすみれさんが、みんなと同じように体育祭に参加できたのはうれしかったに違いない。ちょっとした工夫、「すみれ砲」の思いやりは素晴らしいことだと思う。

学級タイムの星陵祭の総括で、●●くんが来年に向けての意見を求めた時、私はあまり盛り上がらないのではないかと思っていたのだが、各パートで気づいたことをしっかり発表してくれる人が相次いで、心密かに「こういうのが学級タイムのあるべき姿だ！」と感心して見ていた。自ら意見を言えなかった人も、他の人の意見を聞きながら納得したり、触発されて来年への工夫を思い浮かべたりしていたに違いない。そういう一つ一つの経験や思いが、来年の合唱祭や星陵祭に結びついていくことだろう。

つまり、意見を言った人もその意見をキチンと受け止めた人も、ともに「すみれ砲」を共有した仲間だということだ。行事をみんなで一緒に作り、楽しみ、その過程で起こった悶着や和解、喜びや悩みなどを、かけがえのない「日比谷の日々」として記憶にとどめるための、その大切な仲間だということだ。